

DOCTOR

ドクター クローズアップ **closeup**

函館中央病院内科医長

板谷 利 氏



いたや さとし
平成20年旭川医科大学医学部卒業。
北海道がんセンター、旭川医科大学病院、北海道大学病院、KKR札幌医療センター、若見沢市立病院、北海道大学病院、北海道医療大学病院を経て、平成30年函館中央病院に勤務、同年内科医長に就任する。
日本内科学会認定医、日本糖尿病学会専門医。

全身を診るといふ考え方の総合診療を実践

道南では数少ない糖尿病専門医の資格も取得

昨年4月に函館中央病院（本橋雅壽病院長）の内科医長として就任したのが板谷利医師だ。病院の勤務医だった父親の姿に影響を受けて医師になることを決意、旭川医科大学医学部に入學した。

卒業後の初期研修で外科系よりも内科系に興味を持ち、北海道大学病院第一内科（現・内科1）へ入局する。「全身を診るといふ考え方、病気の説明や患者さんの心配事に責任を持つて接する主治医となることを診療理念としている点に強く惹かれました」。

北海道大学病院を経て、平成23年KKR札幌医療センターに勤務。「1年間、週1回総合診療科の外來で内科一般をはじめ、広く診療を行ってきました」。大

学関連病院の呼吸器内科や循環器内科でも診療経験を重ね、25年から勤務した北海道大学病院では糖尿病の診療も担当していた。

昨年4月函館中央病院内科に勤務。「当院の内科は、内科本来のプライマリ・ケアを重視した治療方針で、

臓器別専門科とも連携を図りながら、専門科の振り分けが難しいケースも含めて積極的に対応しています」。内科では糖尿病内分泌専門外來も開設。診療所に通院中の患者でも血糖コントロールを目的とした短期間の入院も実施している。

板谷医師は昨年10月に実施された日本糖尿病学会の専門医試験に合格した。函館・道南地区には同専門医が少なく、板谷医師が5人目となった。今後は糖尿病専門医として、専門的知識

をもとに質の高い糖尿病の診療や患者への指導、かかりつけ医と連携した診療に関する助言など、地域の糖尿病診療における役割も期待されている。

糖尿病患者は膵臓がんに注意することが必要だと板谷医師は指摘する。「特に50歳以上で新たに糖尿病を発症した患者は、その0.7%が3年以内に膵臓がんと診断されています。それと糖尿病のコントロールが悪化した際も膵臓がんを疑った検査を実施することが重要です」。

糖尿病の治療は選択肢が増えているが、「患者さんのライフスタイルに合った治療を選択できるようにしている」と話す。「外來では内科一般を広く診療していますが、患者さんの訴えに耳を傾け、変化をよく観察し、出来る限り丁寧に説明することを心がけています。また、先を見据えた治療の実践と外科医の負担を軽減することにも尽力していきます」。今年も総合診療専門医の資格取得も目指している。